

プログラムのページ

担当 吉 澤 正

6907. 有理式の最良近似式を求めるプログラム

山下眞一郎 (富士通株式会社)

ここに述べるプログラムは、重率を考慮した多項式を含む、有理式による最良近似式を求めるもので、相対誤差、または絶対誤差を最小にする多項式、または有理式の近似式を求めることができる。

計算法を説明するのに必要な諸定義を、つぎのようにおく。

被近似関数 $F(X)$ (1)

近似区間 $A \leq X \leq B$ (2)

近似式 $P_L(X)/Q_M(X)$

$$= \sum_{i=0}^L p_i X^i / \left(1.0 + \sum_{j=1}^M q_j X^j \right)$$
 (3)

重率関数 $W(X),$
 $W(A \leq X \leq B) \neq 0$ (4)

誤差関数 $E(X) = W(X) \{ F(X) - P_L(X)/Q_M(X) \}$ (5)

近似式の次数 $N = L + M$ (6)

よく知られているように、近似式が最良近似式であるためには、つぎの最良近似の条件が成立しなければならない。

- (1) $E(X)$ の相隣る極大値の符号が異なること。
- (2) $|E(X)|$ の極大値は、区間内で少なくとも $(N+2)$ 個あること。
- (3) $|E(X)|$ の極大値がすべて等しいこと。

実用的な範囲で近似区間の両端は極大点になり、区間内には N 個の極大点がある。このような関数であることが、このプログラムが正しく動作するための第1条件である。以下のカッコ内の条件番号は、この意味である。

近似区間を $-1 \leq t \leq +1$ に変換して考え、 $E(X)$ が $N+1$ 次のチェビシェフ多項式 $T_{N+1}(t)$ に定数 C_{N+1} を乗じたものとすれば、最良近似の条件を満たすので、 $E(X)$ が $C_{N+1}T_{N+1}(t)$ に類似していると仮定する(第2条件) これにより、 $E(X)$ の0点と極大点は

$T_{N+1}(t)$ のそれとあまり変わらないと仮定できる(第3条件)。したがって

$E(X)$ の0点の近似値:

$$X_i = \left(\frac{B-A}{2} \right) \cos \left(\frac{2i+1}{N+1} \frac{\pi}{2} \right) + \left(\frac{B+A}{2} \right) \quad (7)$$

$E(X)$ の極大点の近似値:

$$X_j = \left(\frac{B-A}{2} \right) \cos \left(\frac{2j}{N+1} \frac{\pi}{2} \right) + \left(\frac{B+A}{2} \right) \quad (8)$$

最良近似式は以下に述べるように、近似式を逐次補正して求める。何回目かの近似式を $P_L(X)/Q_M(X)$ とし、最良近似式を $P_L^*(X)/Q_M^*(X)$ とする。この誤差関数をそれぞれつぎのように表わす。

$$\left. \begin{aligned} E(X) &= W(X) \{ F(X) - P_L(X)/Q_M(X) \} \\ E^*(X) &= W(X) \{ F(X) - P_L^*(X)/Q_M^*(X) \} \end{aligned} \right\} \quad (9)$$

$P_L(X)$ を $\Delta P_L(X)$ 、 $Q_M(X)$ を $\Delta Q_M(X)$ 補正すれば、 $P_L^*(X)$ 、 $Q_M^*(X)$ が得られるとする。すなわち

$$\left. \begin{aligned} P_L^*(X) &= P_L(X) + \Delta P_L(X) \\ Q_M^*(X) &= Q_M(X) + \Delta Q_M(X) \end{aligned} \right\} \quad (10)$$

$E(X)$ の極大点を X_j とし、 $E(X)$ の極大点と $E^*(X)$ の極大点とあまり変わらないと仮定する(第4条件)。これから、次式を仮定する(第5条件)。

$$E^*(X_j) = (-1)^j \rho; \rho = \text{定数}, \quad j=0, 1, 2, \dots, N, N+1 \quad (11)$$

このとき

$$\begin{aligned} E(X_j) - E^*(X_j) &= W(X_j) \{ F(X_j) - P_L(X_j)/Q_M(X_j) \} \\ &\quad - W(X_j) \{ F(X_j) - P_L^*(X_j)/Q_M^*(X_j) \} \\ &= W(X_j) \{ P_L^*(X_j)/Q_M^*(X_j) - P_L(X_j)/Q_M(X_j) \} \\ &= W(X_j) \frac{\Delta P_L(X_j) Q_M(X_j) - \Delta Q_M(X_j) P_L(X_j)}{Q_M(X_j) \{ Q_M(X_j) + \Delta Q_M(X_j) \}} \\ &= E(X_j) - (-1)^j \rho \end{aligned} \quad (12)$$

$Q_M(X_j)$ に比べて $\Delta Q_M(X_j)$ が十分小さいと仮定する(第6条件)。これにより、(12)式の分母の $\Delta Q_M(X_j)$ が無視できるので、 ΔP_L 、 $\Delta Q_M(X)$ および ρ に

関して、 $(N+2)$ 元連立一次方程式となる。

$$\Delta P_L(X) = \sum_{i=0}^L \Delta p_i X^i, \Delta Q_M(X) = \sum_{i=1}^M \Delta q_i X^i$$

とおき、(12)式の j の相隣る式を加え、 ρ を消去すると、つぎの $(N+1)$ 元連立一次方程式を得る。

$$\begin{aligned} & \sum_{k=0}^L \left\{ \frac{W(X_j) X_j^k}{Q_M(X_j)} + \frac{W(X_{j+1}) X_{j+1}^k}{Q_M(X_{j+1})} \right\} \Delta p_k \\ & + \sum_{k=0}^M \left\{ -\frac{W(X_j) X_j^k P_L(X_j)}{Q_M^2(X_j)} \right. \\ & \quad \left. - \frac{W(X_{j+1}) X_{j+1}^k P_L(X_{j+1})}{Q_M^2(X_{j+1})} \right\} \Delta q_k \\ & = E(X_j) + E(X_{j+1}), \quad j=0, 1, \dots, N \quad (13) \end{aligned}$$

この方程式を解き、 $\Delta P_L(X)$ 、 $\Delta Q_M(X)$ を得て、 $P_L(X)$ 、 $Q_M(X)$ を(10)式で補正する。逐次近似を行なうための初期解は、(7)式の点で $F(X)$ と $P_L(X)/Q_M(X)$ が一致するような $P_L(X)$ 、 $Q_M(X)$ を用いる。

$$\begin{aligned} & \left. \begin{aligned} & F(X_i) - P_L(X_i)/Q_M(X_i) = 0 \\ \therefore & P_L(X_i) - F(X_i) \{Q_M(X_i) - 1.0\} = F(X_i) \\ \therefore & \sum_{k=0}^L (X_i^k) p_k + \sum_{k=1}^M (-F(X_i) X_i^k) q_k = F(X_i) \end{aligned} \right\} \quad (14) \end{aligned}$$

(14)式は(13)式と同様に $(N+1)$ 元連立一次方程式であるので、0回目の近似式はすべて0と考え、(14)式を解くことが1回目の補正と考えるとつごうがよい。この方程式は、いわゆるタチの悪い方程式であるが、右辺の精度以上の精度で解けなければならない(第7条件)。

計算手順について以下に述べる。 L 、 M に特別な制限がないので、 $L \geq 0$ 、 $M \geq 0$ に対して計算できることを意味している。プログラムは $L+M \geq 1$ に対して計算できるようにした。計算の手順はつぎのとおりである。

- (A) $P_L(X)$ 、 $Q_M(X)$ の初期値を0としておく。
また、(8)式に従って、 $E(X)$ の極大点の近似値を計算しておく。
- (B) (14)式に従う $(N+1)$ 元連立一次方程式を、(7)式を計算しながら立てる。
- (C) $(N+1)$ 元連立一次方程式を掃き出し法で解く。
- (D) $P_L(X)$ 、 $Q_M(X)$ を補正する。
- (E) 新しい極大点を求める。両端は極大点として特別に扱う。中間の N 個は山登り法によって求める。あまり精度を要さないが、これが成功する必要がある(第8条件)。

- (F) 極大値を求め、絶対値の最大と最小を求める。
その差と最大との比が小さければ、最良近似式が求められたと判断し、(H)より計算する。
- (G) (13)式に従う $(N+1)$ 元連立一次方程式を立てて、(C)より繰り返す。
- (H) つぎのものを印刷する。近似式、誤差の極大点と極大値。最後に近似区間を等分して、101点の誤差を求め、最大誤差を50に正規化して、誤差グラフを描く。

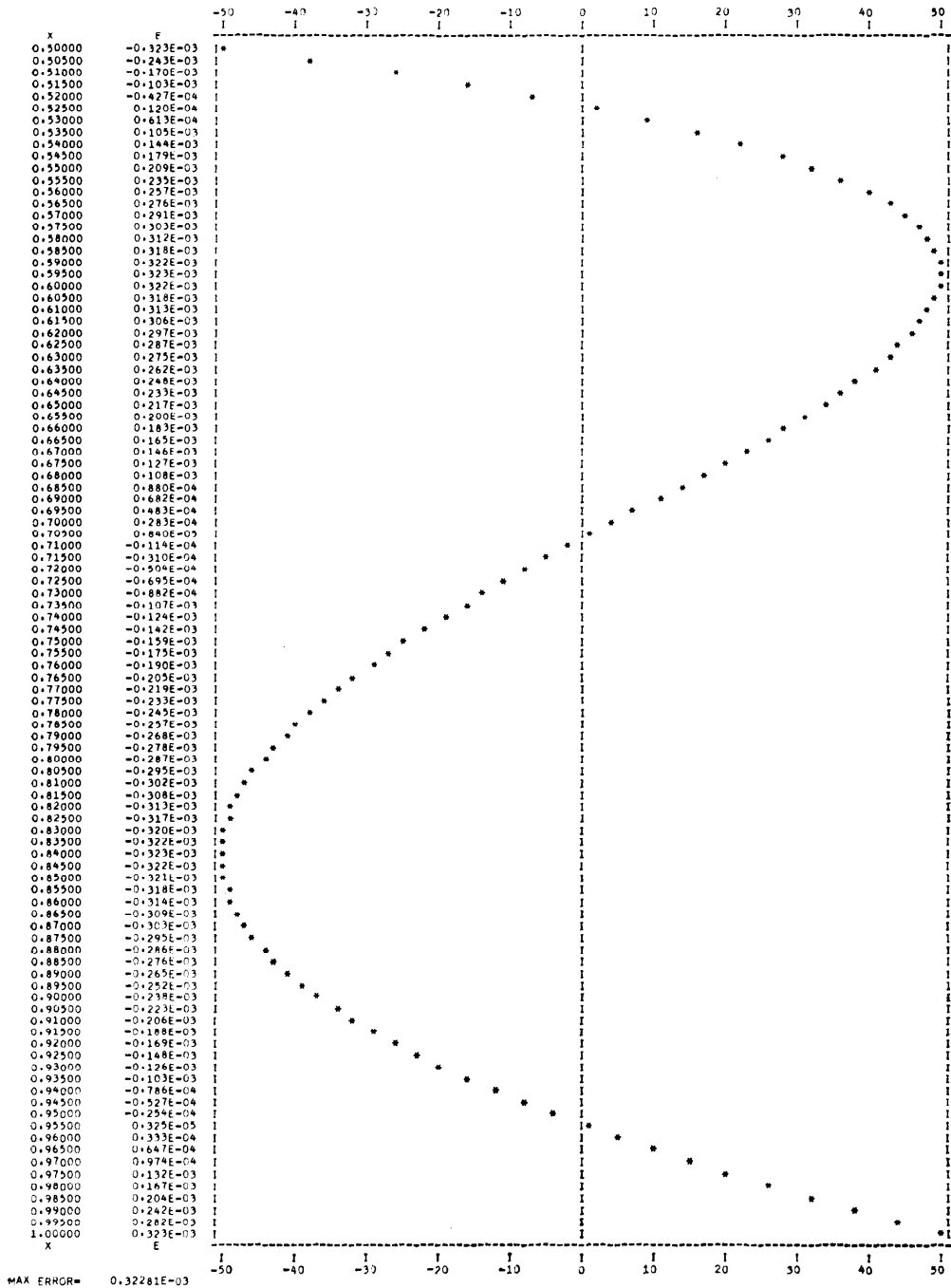
プログラムは FACOM 230-60 FORTRAN で作った。他の計算機では、後述の点に関して、手なおしが必要であろう。とくに、実数型定数、変数、関数が倍精度型であることに注意されたい。演算桁数は精度の高い近似式や高次の近似式を作るとき、十分大きくなければならない。そうでないと、第7,8条件が満たされずに、ループするかもしれない。それゆえ、演算桁数が可変長である FACOM 230-20/30 MCP III FORTRANなどで計算するとよい。主プログラムでは、近似式の次数、関数、重率、誤差、収束判定定数を定義している。計算はMARIで行なう。手順(A)~(H)はそれを実行する前のところに注釈行として入れた。POLは多項式の値を求め、PQは有理式の値を求める。YAMAは極大点を求め、CURVEはグラフを描く。主プログラムおよびその結果は、平方根の近似式の相対誤差を最小にするものである。絶対精度を最小にするためには、重率関数を $W(X)=1.0$ とすればよい。数紙の関係で結果は一部を示した。なお、有理式近似では、分子または分母の最高次数の係数を1.0とすれば、乗算回数が1回少なくてすむ。

このプログラムを他の計算機用に記述するためには、つぎの点に注意して書き換えが必要である。

1. 添字式が式になっている。
2. DOのパラメータが式になっている。
3. 書式の文字表現が“文字列”となっている。
4. 書式の中のカンマ“,”が省略されている。
5. 実引数に文関数、文番号が使われている。
6. 多重代入文が使われている。
7. 混合演算が使われている。
8. 印刷の1行が136文字である(グラフのところだけ、100字を越えている)。
9. 数値は最大約 10^{+77} まで表現できる。
10. 倍精度実数は約18桁の精度がある。

このように、書き換えの必要な文には、文の内部番号に丸印をつけておいた。

第 1 表 第 3 表の結果の誤差のグラフ



新しい関数について、近似式を求めるときは、主プログラムだけ作り変えればよい。そして、つぎのものを用意する。

1. 被近似関数 $F(X)$
2. 重率関数 $W(X)$
3. 誤差関数 $E(X)$
4. 近似区間の両端 $A, B; A < B$
5. 近似式の次数 $L, M, N; N = L + M$
6. 収束判定用定数 $EPS1, EPS2$

第 2 表 FACOM 230-60 による最良近似式を求めるプログラム

```

1  OPTION LIST,MAP,DOUBLE
2  COMMON L,M,N,P(40),Q(40),Z(40,41)
3  COMMON/PARAM/A,B,EPS1,EPS2
4  C FUNCTION
5  F(X)=SQRT(X)
6  C WEIGHT FUNCTION
7  W(X)=1.0/SQRT(X)
8  C ERROR FUNCTION
9  E(X)=W(X)*(F(X)-P@X)
10 C
11 A=0.5
12 B=1.0
13 EPS1=EPS2=1.0E-4
14 DO 10 N=1,6
15 DO 10 L=0,N
16 W=N-L
17 CALL MARI(F,E,W,*300)
18 FORMAT(1H1///10X,'SQRT(X)')
19 STOP
20 END

1  SUBROUTINE MARI(F,F,W,FMT)
2  COMMON L,M,N,P(40),Q(40),Z(40,41)
3  COMMON/PARAM/A,B,EPS1,EPS2
4  DIMENSION FMT(1),X(101),EX(101)
5  A1=0.5*(B-A)
6  A2=0.5*(B+A)
7  PN=1.5707963/FL0AT(N+1)
8  C (A)
9  DO 7 I=1,L+1
10 P(I)=0.0
11 DO 8 I=1,M+1
12 Q(I)=0.0
13 W(I)=1.0
14 X(I)=H
15 DO 10 I=1,N
16 X(I+1)=A1+COS(FL0AT(2*I)*PN)+A2
17 X(N+2)=A
18 C (b)
19 DO 20 I=1,N+1
20 U=A1+COS(FL0AT(2*I-1)*PN)+A2
21 FU=F(U)
22 Z(I,1)=1.0
23 IF(L.EQ.0) GO TO 21
24 DO 22 J=1,L
25 Z(I,J+1)=Z(I,J)*U
26 21 IF(M.EQ.0) GO TO 23
27 Z(I,L+2)=-FU*U
28 IF(M.EQ.1) GO TO 23
29 DO 24 J=2,M
30 Z(I,L+J+1)=Z(I,L+J)*U
31 Z(I,N+2)=FU
32 CONTINUE
33 C (C)
34 DO 31 K=1,N+1
35 DO 32 I=K+1,N+2
36 Z(K,I)=Z(K,I)/Z(K,K)
37 DO 33 I=1,N-1
38 IF(K=1) 34,33,34
39 DO 36 J=K+1,N+2
40 Z(I,J)=Z(I,J)-Z(I,K)*Z(K,J)
41 CONTINUE
42 CONTINUE
43 C (D)
44 IF(M.LE.0) GO TO 41
45 DO 42 I=1,M
46 Q(I+1)=Z(L+I+1,N+2)+Q(I+1)
47 DO 40 I=1,L+1
48 P(I)=Z(I,N+2)+P(I)
49 C (E)
50 DO 43 I=1,N
51 XA=0.5*(X(I+2)+X(I+1))
52 XB=0.5*(X(I+1)+X(I))
53 CALL YAMA(E,EPS1,X(I+1),XA,XB)
54 C (F)
55 EMAX=0.0
56 EMIN=1.0E+70
57 DO 51 I=1,N+2
58 EE=EX(I)-E(X(I))
59 IF(ABS(EE).GT.EMAX)EMAX=ABS(EE)
60 IF(ABS(EE).LT.EMIN)EMIN=ABS(EE)
61 IF(EMAX=EMIN.LT.EPS2*EMAX)GO TO 90
62 C (G)
63 U=X(1)
64 FP=POL(P,L,U)
65 FQ=POL(Q,M,U)
66 WU=W(U)
67 Z(1,1)=WU/FQ
68 IF(L.EQ.0) GO TO 81
69 DO 82 J=1,L
70 Z(1,J+1)=Z(1,J)*U
71 81 IF(M.EQ.0) GO TO 83
72 Z(1,L+2)=-WU*FP/U/(FQ*FQ)
73 IF(M.EQ.1) GO TO 83
74 DO 84 J=2,M
75 Z(1,L+J+1)=Z(1,L+J)*U
76 83 Z(1,N+2)=E(U)
77 DO 85 I=1,N+1
78 U=X(I+1)
79 FP=POL(P,L,U)
80 FQ=POL(Q,M,U)
81 WU=W(U)
82 Z(I+1,1)=WU/FQ
83 IF(L.EQ.0) GO TO 86
84 DO 87 J=1,L
85 Z(I+1,J+1)=Z(I+1,J)*U
86 IF(M.EQ.0) GO TO 88
87 Z(I+1,L+2)=-WU*FP/U/(FQ*FQ)
88 IF(M.EQ.1) GO TO 88
89 DO 89 J=2,M
90 Z(I+1,L+J+1)=Z(I+1,L+J)*U
91 88 Z(I+1,N+2)=E(U)
92 DO 95 J=1,N+2
93 Z(I,J)=Z(I,J)+Z(I+1,J)
94 CONTINUE
95 GO TO 99
96 C (H)
97 WRITE(6,FMT)
98 WRITE(6,101)(I,P(I+1),I=0,L)
99 FORMAT(5X2HP=15,E30,18/(7X15,E30,18))
100 WRITE(6,102)(I,Q(I+1),I=0,M)
101 FORMAT(5X2HP=15,E30,18/(7X15,E30,18))
102 WRITE(6,201)(I,X(I),I=1,N+2)
201 FORMAT(7X5,15,E20,8)
103 DO 60 I=1,101
104 X(I)=A+(B-A)*(I-1)/100.0
105 EX(I)=E(X(I))
106 CALL CURVE(101,X,E,EMAX)
107 RETURN
108 END
    
```

```

1      FUNCTION POL(A,N,X)
2      DIMENSION A(N)
3      POL=A(N+1)
4      IF(N.EQ.0)RETURN
5      DO 10 I=N+1,-1
6      POL=POL*X+A(I)
7      RETURN
8      END

1      SUBROUTINE CURVE(N,X,E,AMAX)
2      DIMENSION IA(103),IB(103),IC(11)
3      DIMENSION X(101),E(101)
4      DATA IA/103*1H /,IB/103*1H- /
5      DATA IA(1),IB(1),IC(1) /
6      DATA IC/-50,-40,-30,-20,-10,
7      C 0+10+20,30,40+50/
8      WRITE(6,20)
9      20 FORMAT(1H1//)
10     WRITE(6,40) IC
11     40 FORMAT(22X,5I10,19,5I10)
12     WRITE(6,50) IA
13     50 FORMAT(30X,10(1H1,9X),A1)
14     WRITE(6,70) IB
15     70 FORMAT(1H ,5X,1HX,14X,1HE,7X,103A1)
16     DO 100 I=1,N
17     IV=50+0*E(I)/AMAX+52.5
18     IA(I)=IA(52)+IA(103)*I
19     IA(IV)=IK
20     WRITE(6,200)X(I),E(I),IA
21     200 IA(IV)= IS
22     100 FURMAT(1H ,F10.5,3X,E13.3,2X,103A1)
23     WRITE(6,70) IB
24     WRITE(6,50) IA
25     WRITE(6,40) IC
26     WRITE(6,300)AMAX
27     300 FURMAT(1H ,10HMAX ERROR= ,E15.5)
28     RETURN
29     END

1      FUNCTION P0(X)
2      COMMON L,M,N,P(40),Q(40),Z(40,41)
3      PX = P(L+1)
4      IF(L.EQ.0) GO TO 15
5      DO 10 I=1,L
6      PX = PX*X + P(L+1-I)
7      10 QX = Q(M+1)
8      IF(M.EQ.0) GO TO 25
9      DO 20 I=1,M
10     QX = QX*X + Q(M+1-I)
11     20 PQ = PX/QX
12     RETURN
13     END

1      SUBROUTINE YAMA(F,EPS,X,XA,XB)
2      KEY=9
3      H=(XB-XA)*0.25
4      F0=ABS(F(X))
5      99 CONTINUE
6      X1=X+H
7      IF(X1.GT.XB) X1=XB
8      X2=X-H
9      IF(X2.LT.XA) X2=XA
10     F1=ABS(F(X1))
11     F2=ABS(F(X2))
12     IF(F2.LE.F0.AND.F0.GE.F1) GO TO 10
13     IF(F2=F1) 1,10,2
14     1 X=X1
15     FU=F1
16     IF(KEY.EQ.2) H=0.5*H
17     KEY=1
18     GO TO 99
19     2 X=X2
20     FU=F2
21     IF(KEY.EQ.1) H=0.5*H
22     KEY=2
23     GO TO 99
24     10 H=0.5*H
25     IF(ABS(F0-F1)*ABS(F0-F2)
26     C .GE. EPS*F0) GO TO 99
27     RETURN
28     F1=0

```

第3表 相对誤差の平方根の結果の例

	√RT(X)	RANGE	0.5 ≤ x ≤ 1.0
	(次数)	(係数)	
P=	0	0.278208798315292618E 00	
	1	0.118920760524840739E 01	
Q=	0	0.100000000000000000E 01	
	1	0.467890223606160240E 00	
	1	0.10000000E 01	0.32278983E-03
	2	0.84072996E 00	-0.32280973E-03
	3	0.59490678E 00	0.32279343E-03
	4	0.50000000E 00	-0.32279058E-03
	(極大点)		(最大誤差)

本プログラムを完成するにあたって、協力していた
 だいた富士通ソフトウェア技術部第2プログラム課

FORTRAN グループの諸氏に謝意を表する。
 (昭和44年8月28日受付)